



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「デボラの歌」 (士 5 : 2-31a) における「間テキスト性」
Author(s)	山吉, 智久
Citation	基督教學, 56-57, 1-23
Issue Date	2022-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92841
Type	journal article
File Information	01yamayoshi.pdf



「デボラの歌」(士五2—31a)における「間テキスト性」

山吉智久

はじめに

旧約聖書の『士師記』は、イスラエルの民がカナンの地に定住してから王国を成立させる前までの時代について語る。そこでは、周辺の諸民族との抗争の中で、「士師」と呼ばれる民の指導者たちの活動が描かれており、中でも五章には、「デボラの歌」と呼ばれる詩文が収録されている。カナン軍の長シセラに対するデボラとバラクの勝利と、ケ二人へベルの妻ヤエルの手によるシセラ殺害を語るこの歌は、旧約聖書の中で、最も難解なテキストの一つに数え入れられる。またこの歌の直前の四章には、同じ出来事を散文の形で報告する記述が見られる。「デボラの歌」を旧約聖書の他のテキストとの関連の中で捉える、いわゆる「間テキスト性」(Intertextuality)^①について考察するには、この先行する『士師記』四章の散文による記述との比較分析は欠くことのできない作業である。ある一つの同じ事柄についての報告が前後の章に繰り返されていることには、散文と詩文という文体的な相違以上の理由があると思われる。本稿が目指すのは、『士師記』五章の「デボラの歌」を四章の散文による報告と比較することによって、この詩文を生み出した詠い手の特性の一端を明らかにすることである。

一 テクスト

『士師記』五章の詳しい分析のために、まずはマソラ本文（BHS）の日本語訳テキストを示す。本箇所のマソラ本文には、旧約聖書中に一度しか現れない語（hapax legomena）がいくつも見られるだけでなく、語意や文意の詳細が定かではない箇所が少なくない。本文批評的に議論のある箇所や、文法的、語彙的な説明については、その都度、注にて論じる。なお、訳文中における〈 〉は、マソラ本文を読み替えた箇所を表す。

- 1 その日、デボラとアビノアムの子バラクは歌って、言った。⁽²⁾
- 2 イスラエルにおいて、伸ばした髪をほどくゆえに、⁽³⁾
民がすすんで身をささげるゆえに、ヤハウエを祝福せよ。
- 3 聞け、王たちよ、耳傾けよ、君主たちよ。
私こそはヤハウエに、私こそは歌う。⁽⁴⁾
- 4 私はイスラエルの神ヤハウエにほめ歌う。
ヤハウエよ、あなたがセイルから出で立つとき、
あなたがエドムの野から進み出るとき、
地は震え、天も滴らせた。⁽⁵⁾ 雲も滴らせた、水を。
- 5 山々は流れ出た、⁽⁶⁾ヤハウエの前で。
それはシナイ、イスラエルの神ヤハウエの前で。
- 6 アナトの子シャムガルの時代、ヤエルの時代に、⁽⁷⁾途は絶えた。

徑^{みち}を行く者たちは曲がりくねった途^{みち}を行く。⁽⁷⁾

7 開けた地の住民たちは絶えた。⁽⁸⁾ イスラエルで、彼らは絶えた。

あなた、デボラが立つまで。⁽⁹⁾ あなた、イスラエルの母が立つまで。

8 神は新しい者たちを選ぶ。⁽¹⁰⁾ そのとき、城門には戦いがあり、⁽¹¹⁾

盾も槍も見られなかった、イスラエルの四万人には。

9 わが心はイスラエルの指揮者たちに、

この民のすすんで身をささげる者たちに、ヤハウエを祝福せよ。

10 白い雌ロバ⁽¹²⁾に乗り、衣の上に座して、道を行く者たちよ、嘆美せよ。⁽¹³⁾

11 水汲み場⁽¹⁴⁾で配る者たちの声よりも大きく、そこでうたえ、ヤハウエの義を。

イスラエルにおける開けた地の住民たちの義を。

そのとき、ヤハウエの民は城門に下った。

12 起きよ、起きよ、デボラよ、起きよ、歌を語れ。⁽¹⁵⁾

立て、バラクよ、あなたの捕虜たちを連行せよ、アビノアムの子よ。

13 そのとき、逃れ出た者は、⁽¹⁶⁾ 貴人たちのもとに〈下った〉。⁽¹⁷⁾

〈ヤハウエの民〉⁽¹⁸⁾は、私のもとに〈下った〉、勇士たちのもとで。

14 エフライムからは、アマレクにその根^ねがある者たちが、⁽¹⁹⁾

あなたの後ろには、ベニヤミンがあなたの民と共に。

マキルからは、指揮者たちが下った。

そしてゼブルンからは、書記⁽²⁰⁾の杖を運ぶ者たちが。

- 15 イサカルのが官吏たちはデボラと共に、
そしてイサカル、またバラクも、平野に、彼は徒歩で遣わされた。⁽²²⁾
ルベンの士族では、心の定めが大きかった。⁽²³⁾
なぜ、あなたは二重の囲いの間に座っていたのか、群れを導く笛を聞くために。
16 ルベンの士族には、心の探りが大きかった。
17 ギレアドは、ヨルダンの向こう側に居続けた。
そしてダンは、なぜ舟に留まるのか。
18 アシエルは、海辺に座し、その波止場に居続ける。
ゼブルンは、そのいのちを死に賭した民。
そしてナフタリは、野の高みの上に。
19 王たちはやって来て、戦った、そのとき、カナンの王たちは戦った、
メギドの水上の、タナクで。彼らは銀一片も取らなかった。
20 天からは戦った、星々が、それらの軌道から、シセラと戦った。
21 キシヨン川は、彼らを流し去った。太古の川、キシヨン川。
歩め、わがいのちよ、力強く。
22 そのとき、馬の踵は打った。⁽²⁴⁾ 疾駆、その強者たちの疾駆によって。⁽²⁵⁾
23 「メロズを呪え」、ヤハウエの使者は言った、「その住民を激しく呪え」。
彼らはやって来なかったからだ、ヤハウエを助けるために、
ヤハウエを助けるために、勇士たちのもので。

24 祝福されよ、女たちの中でも、ヤエル、ケ二人へベルの妻は。

天幕の女たちの中でも、祝福されよ。

25 水を彼は求め、ミルクを彼女は与えた。貴人たちの鉢で、凝乳ぎようにゅうを差し出した。

26 彼女はその手を杭に伸ばした、その右手を職人たちの槌づちに。

彼女はシセラを打った、彼の頭を打ち砕いた。

彼女は打ち壊し、彼のこめかみを貫いた。

27 彼女の両足の間に、彼はくずおれ、倒れて、横たわった。

彼女の両足の間に、彼はくずおれ、倒れた。

くずおれたその場所で、彼は倒れて、荒れ果てた。⁽²⁸⁾

28 窓(29)から、眺め下ろして、シセラの母は喚わめいた、格子窓から。

「なぜもたついているのか、彼の戦車は、やって来ることに。

なぜ遅いのか、彼の戦車の歩みは」。

29 彼女の女官吏たちの最も賢い者たちは、彼女に答える。⁽³¹⁾

また彼女も、彼女への言葉を繰り返す。

30 「彼らは、見つけて、分配しているのではないか、略奪品を。

一胎、二胎、男一人頭に。

染め布の略奪品は、シセラに、染め布の略奪品は。

染め布の織物一反、二反は、略奪品の首に」。

31 こうして、あなたのすべての敵は滅びる、ヤハウェよ。

かれを愛する者たちは、日の出のように、その力の中にある。
そしてこの地は四十年にわたって平穏であった。

二 文学的構成

『士師記』五章は、1節の「その日、デボラとアビノアムの子バラクは歌って、言った」という記述に始まり、31節bの「そしてこの地は四十年にわたって平穏であった」という記述で終わる。1節の「その日」は明らかに、先行の四章の散文による記述を前提にしたものであり、両章をつなぐ文として機能している。また、「そしてこの地は——年にわたって平穏であった」という表現は、『士師記』三章11節のオトニエル、三章30節のエフド、八章28節のギデオンの物語の締め括りにも見られる。この記述は、『士師記』に一定の枠組みをもたらした申命記史家の編集の手に帰されよう。これらの節に挟まれた2—31節aが、詩文体で綴られた、いわゆる「デボラの歌」と呼ばれるテキストである。⁽³²⁾
『士師記』五章の文学的な構成は、内容的に見て、以下のように図式的に纏めることができる。⁽³³⁾

1 導入

.....

2—3 歌への傾聴の呼びかけ

4—5 ヤハウエ顕現

6—13 戦いに至るまでの状況

14—18 戦いに参加した部族、しなかった部族

19—23 戦闘

24—27 ヘベルの妻ヤエルへの祝福

28—30 シセラの母とその女官たち

31 a 敵の滅びと民の栄え

.....

31 b 結語

「デボラの歌」は、2—3節において、戦いに関わったイスラエルの民ならびに敗北したカナンの王たちに対して、一人称単数の「私」が神ヤハウェにうたう歌に耳傾けるよう呼びかけることから始まる。続く4—5節は、ヤハウェへの呼びかけに転じ、この神が天変地異を伴って、南方から顕現することが語られる。6—13節で述べられているのは、戦いに至るまでの経緯である。イスラエルの民は危機的な状況に陥っていたが（6—7節a）、イスラエルの母たるデボラの登場により（7節b）、彼女とバラクによる指揮の下、戦いに向けて結集する（9—13節）。

14—18節では、戦いに参加した部族と参加しなかった部族について語られる。参加したとされているのは、14—15節aのエフライム、ベニヤミン、マキル、ゼブルン、イサカル、また18節にはナフタリと並んで再びゼブルンが挙げられている。これに対して、15b—17節のルベン、ギレアド、ダン、アシエルは、戦いに参加しなかったとされている。19—23節は、戦闘の描写である。この戦いがメギドの水上、タナクにて行われ、カナンの王たちが何の戦果もなく敗北したことの報告（19節）に続いて、この戦いに天の星々が加勢したこと（20節）、キシヨン川がカナンの軍勢を流し去り（21節）、戦場には馬が駆け巡った様が語られる（22節）。23節では、この戦闘に加わらなかったとされるメロズの住民に対する呪詛が述べられている。

24節冒頭と末尾の「祝福されよ」(*brk*)は、23節で繰り返される「呪え」(*rw*)と対照されて、³⁴24—27節は、ヘベルの妻ヤエルへの祝福になっている。そこでは、彼女が將軍シセラを殺害したときの様子が描かれる。続く28—30節は、シセラの母とその女官たちとの会話へと場面が移る。シセラの母は窓越しに外を眺め、息子がなかなか帰っていないことに不平をこぼすが、彼女の女官たちと共に、それは彼らが戦利品を分け合うことに夢中になっているからであると思像する。

本詩は、31節aにおいて、敵の滅びとヤハウエの民の繁栄が確認されて締め括られている。

三 『士師記』四章との比較

『士師記』四章の散文による記述には、カナン人に対抗するイスラエルの民を率いた指導者としてのデボラとバラク(四4以下／五12以下)、戦場としてのキシヨン川(四7／五21)、ケ二人ヘベルの妻ヤエルによる將軍シセラの殺害(四17以下／五25以下)など、内容的に「デボラの歌」と並行する描写が見られ、二つの報告は、ある一つの同じ出来事に関するものであると思われる。しかしながら、両者を仔細に検証すると、互いに矛盾する記述や、それぞれに固有の記述が認められる。

A デボラとバラク

イスラエルの民を率いたとされるデボラとバラクという二人の指導者たちについて、五章の「デボラの歌」では、デボラは7節に初出で、彼女が「イスラエルの母」として「立った」(*qwm*)とされ、その後の12節で「起きて」(*ws*)、「歌を語る」(*dlr pi + sr*)よう呼びかけられ、15節でイサカル族の長たちと共に戦場に赴いたとされるだけで、彼女が

何者であつたかについての言及に乏しい。「イスラエルの母」(*em b'israh'el*)⁽³³⁾ という称号は、旧約聖書中、本箇所以外に『サムエル記下』二〇章19節にのみ見られる稀有なもので、「デボラの歌」の文脈上、「母」という語が、敵方の將軍であるシセラの「母」に通じ、息子シセラの帰還を待つシセラの母の段落(28—30節)と響き合う。もう一人の指導者バラクについても、1節を別とすると、12節に「アビノアムの子」として初めて現れ、15節で戦場の平野へと「遣わされた」(*shl pu*)とされるだけである。これら二人の関わりがどのようなものであつたのかについて、「デボラの歌」の中では何も語られておらず、読み手には暗黙の了解とされている。

これに対して、四章の散文部分においては、デボラは「ラビドトの妻、女預言者」(*bi'bita*)⁽³⁴⁾であり、「イスラエルを裁いた」(*shp*)とされる(士四4)。また彼女は、「エフライム山地のラマとベテルの間にあるデボラのなつめやしの下に座り」、「イスラエルの子らは彼女のもとに上つてきて裁き」(*mispat*)⁽³⁵⁾を求めた(士四5)と言われている。ここでは、「裁く」(*shp*)という語によって、彼女が『士師記』における他の士師たちと同列に置かれると共に、「エフライム山地のラマとベテルの間」という表現から、彼女がベニヤミン族の領域と関わりのある人物であつたことが示唆されている。また、バラクについても、四章では、彼が「アビノアムの子」あることに加えて、「ナフタリのケデシュ」の人であつたとされる(士四6)。そして彼はデボラから呼び寄せられ、次のようなやり取りが行われたと報告されている(士四6—10)。

6 彼女は人を遣わして、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼んだ。彼女は彼に言った、「イスラエルの神ヤハウエは命じたのではなかったのか。『行け、そしてタボル山に集結せよ。あなたと共にナフタリの子らとゼブルンの子らから一万人を取るのだ。7 わたしはあなたに対して、キシヨン川にヤビンの軍の長シセラ、その戦車と軍勢を集結させる。わたしは彼をあなたの手に渡す』と」。8 バラクは彼女に言った、「もしあなたが私と一

緒に行くのなら、私は行きましょう。もしあなたが私と一緒に行かないのなら、私は行きません」。9彼女は言った、「あなたと一緒にいきますとも。但し、あなたが行く道の上にあなたの名誉はありません。なぜならヤハウエは女の手にシセラを売るからです」。デボラは立って、バラクと共にケデシユに行った。10バラクはゼブルンとナフタリをケデシユへと召集し、一万人が彼に従って上った。彼と共にデボラも上った。

『士師記』四章においては、戦いに先んじてデボラとバラクとの間に約束が交わされ、二人が一緒に戦地へと赴くことになった経緯について述べるのと同時に、神が敵を手に「渡す」(*min*) (7節) ないし「売る」(*mlk*) (9節) という表現によって、この戦いを「神ヤハウエの戦い」として「神学化」しているさまが見て取れる。

B カナン王とシセラ

続いて、イスラエルの民が戦った敵方について見ると、五章では、「(カナンの) 王たち」(3、19節) あるいは「君主たち」(3節) とだけ言及され、具体的な名前が挙げられているのは「シセラ」だけである(20、26、28、30節)。また、シセラの母の口に置かれた言葉から、彼が「戦車」(*rekeb* ないし *merkabāh*) を所持していたことが窺い知れるに過ぎない(28節)。

これらカナンの軍勢に関する情報についても、四章の方がより詳しい。敵方の王は、「ハツォルの王、カナンの王ヤビン」であったと明言されている(2、17、23—24節³⁷)。このヤビンについては、『士師記』四章以外に、ヨシユアによるハツォル占領について語る『ヨシユア記』一章1節でも言及されている。ここでは、ヨシユアによるハツォルの征服時に、その当時ヤビンがハツォルの町の王であったとされている。また『士師記』四章では、シセラはその「軍の長」で、「ハロシエト・ハゴイムに住んでいた」とされる(2節³⁸)。また、シセラは「鉄の戦車」(*rekeb*) を九百

台所持し（3、13節）、「イスラエルの子らを二十年にわたって圧迫した」と言われている（3節）。この「圧迫する」(Hs)は、『士師記』において何度も繰り返されるもので（士一34、二18、六9、一〇12、18）、『士師記』を含む「前の預言者」を一つのまとまった記述に仕上げた申命記史家の手に帰されよう。⁽³⁰⁾

C 参加した部族、参加しなかった部族

両章の間で、とりわけ情報量の差が大きいのが、戦いに参加した部族ならびに参加しなかった部族についての記述である。四章の散文部分では、6節においてバラクが「ナフタリの子らとゼブルンの子らから一万人」を取るよう言われ、10節において「バラクはゼブルンとナフタリをケデシユへと召集し、一万人が彼に従って上った」と報告されている。すなわち、戦いに参加したのは、イズレエル平野の北の丘陵地帯を占めたゼブルン（ヨシユ一九10―16）と、そこから更に北の、ガリラヤ湖の西側の地域を占めたナフタリ（申三三23、ヨシユ一九32―39）という二つの部族だけで、その数は一万人であったとされている。

これに対して、五章の詩文部分では、18節において、四章と同じくゼブルンとナフタリが挙げられている。更に14―15節aにおいて、エフライム、ベニヤミン、マキル、ゼブルン、イサカルが列挙されている。エフライムは中央パレスチナの丘陵地帯（ヨシユ一六章）、ベニヤミンは北のエフライムと南のユダに挟まれた東西に細長い地域（ヨシユ一八11―28）、イサカルはガリラヤ南部（ヨシユ一九17―23）をそれぞれに占めたとされる。マキルはマナセの長男で、ヨルダン川東岸のギレアドとバシヤンが割り当てられているが（ヨシユ一七1、民三三39―40）、ここでは、彼らは明らかにヨルダン川西岸、エフライムの北方にいたとされている。⁽³¹⁾すなわち、戦いに参加したとされているのは、専らヨルダン川西側のエフライム山地・丘陵地帯に居を構えた人々である。

「デボラの歌」ではそれに加えて、15b―17節において、ルベン、ギレアド、ダン、アシエルが戦いに参加しなかつ

たとされている。ルベンはヨルダン川東岸南部（ヨシュ一三15―23）、ダンはエルサレム西方の丘陵地帯（ヨシュ一九40―46、士一19）、アシエルはガリラヤ地方西の海岸地帯の北部（ヨシュ一九24―31）を占めたとされる。ギレアドは部族名ではなく、ヨルダン川の東側、北はヤムルク川、南はアルノン川が境界をなす地域名で、ガド族（ヨシュ一三25）とマナセの半部族（ヨシュ一三31）の嗣業の地とされている。⁽⁴¹⁾すなわち、戦いに参加しなかったのは、ヨルダン川東側あるいは地中海に面する地域に居を構えた人々であつたとされている。

これらのことを踏まえると、「デボラの歌」における記述は、ユダとシメオンという南方の諸部族は全く俎上に載せられていないものの、パレスチナの比較的広範囲をその視野に収め、地理的に整理して参加・不参加にそれぞれ割り当てている様が見て取れる。

D 戦場と戦闘の経緯

戦闘が行われた場所について、五章の「デボラの歌」では、「城門」(*ḥalutz*)⁽⁴²⁾において戦いがあり（8節）、そこにヤハウエの民が「下った」(*yad*)⁽⁴³⁾とされ（11節）、またバラクがイサカルと共に「平野」(*‘anah*)⁽⁴⁴⁾原意は「谷」に遣わされたと言われている（15節）。「平野」とは、イズレエル平野のことが念頭に置かれていられると思われるが、「城門」は、これがどの町のことを指しているかはつきりしない。詠い手の意図はむしろ、この語によって、城壁のない「開けた地の住民」（7、11節）たるイスラエルとの対比を際立たせようとしているのかもしれない。その他に具体的な地名として、メギド、タナク（19節）、そしてキシヨン川（21節）が見られる。メギドは、イズレエル平野西方の丘陵地帯にあるテル・エル・ムテセリム（*Tell el-Mutesellim*）⁽⁴⁵⁾、タナクは、メギドの南東約八キロメートル、イズレエル平野と山地の境に位置するテル・タアネク（*Tell Ta'annek*）と同定される。⁽⁴⁶⁾キシヨン川は一般に、ギルボア山の北東を水源に、イズレエル平野を通じていくつものワディを引き込んで、カルメル山の東に沿って北西に進み、最後はアッコ湾へと

流れ込むナフル・エル・ムカッタ (Nahr-el-Mugatta') と同定される。⁽⁴⁴⁾「デボラの歌」では、これらの語や地名によって、戦いの舞台についておよその見当はつくものの、両軍がそれぞれにどのような動きをたどったのかを描くことには意を注がれていない。

これに対して四章では、イスラエルとカナンの両軍がそれぞれに集結してから実際の戦闘へと至る経緯が、丹念に描かれている。それによれば、イスラエル側では、デボラとバラクがゼブルンとナフタリの一万人をケデシムへと召集した後⁽⁴⁵⁾（四10）、タボル山へと上る（四12）。タボル山は、イズレエル平野の東北にある海拔五八メートルの山である。他方、カナン軍は、軍の長シセラ、彼の九百台の鉄の戦車と軍勢がキシオン川へと召集される（四13）。

そしてその後、イスラエルの軍勢がタボル山から「下る」⁽⁴⁶⁾（四14）ことで（四14）、両軍の間での戦闘が繰り広げられたとされている。戦闘は、バラクがシセラの陣営を一人残らず撃つ一方的なものであったとされるが、この戦いにおける勝利の功績は、バラクではなく、「バラクの前を出て行き」（四14）、敵軍を「混乱に陥れた」（四15）神やハウエに帰されている。ここにもまた、この戦いの「神学化」を見ることができる。それに比べると、五章の「デボラの歌」は、天の星々（二0節）や太古の川たるキシオン川（二1節）が擬人化されて、それらがイスラエルに加勢した様子を描いている点が際立つ。

E ヤエルによるシセラ殺害

四章の散文と五章の詩文のいずれの記述でも、物語の山場となっているのが、ヤエルが將軍シセラを殺害した場面である。このときの経緯について語るのは、四章では17—22節である。

17シセラは、ケ二人のヘベルの妻ヤエルの天幕に徒歩で逃げた。というのも、ハツオルの王ヤビンとケ二人ヘベル

の家の間は平和だったからである。18ヤエルは、シセラを呼びに出て、彼に言った、「寄っていらして、ご主人さま。私のもとに寄っていらして。恐れないで下さい」。そこで彼は彼女のもとに、彼女の天幕に寄った。彼女は覆いで彼を覆った。⁽⁴⁶⁾ 19彼は彼女に言った、「さあ、私に水を少しくれ。喉が渴いたのだ」。彼女はミルクの皮袋を開いて、彼に飲ませ、彼を覆った。20彼は彼女に言った、「天幕の入り口にへ立っていてくれ」。⁽⁴⁷⁾ そして人がやって来て、その人が尋ねて、『ここに人はいるか』と言ったら、『いない』と言ってくれ。21ヘベルの妻ヤエルは、天幕の杭を取り、槌をその手に取ると、密かに彼のもとにやって来た。彼女は杭を彼のこめかみに刺した。それは地に入り込んだ。彼は眠り込んでおり、疲れていた。こうして彼は死んだ。22さて見よ、バラクはシセラを追っていた。ヤエルは彼を呼びに出て、彼に言った、「さあ、あなたが探している人をあなたにお見せします」。そこで彼は彼女のもとにやって来た。すると見よ、シセラは倒れて、死んでいた。杭が彼のこめかみにあった。

ここでは、シセラが戦場からヤエルのいる天幕のある方向へと逃亡したこと、そこが逃亡先に選ばれた理由が説明されている(17節)。また、戦闘の場面に先立つ11節において、ケ二人ヘベルが「ケデシュに近いエロン・ベツアアナニムの辺りに天幕を張っていた」と言われており、この場所にヤエルの天幕があった訳が述べられている。ヤエルは言葉巧みにシセラを自分の天幕に招き入れると、水を所望したシセラにミルクを渡して飲ませ、天幕の杭と槌を手にとって、疲れて眠る彼に密かに近づき、杭を彼のこめかみに刺したというのである(18―21節)。ヤエルが、シセラを追ってやって来たバラクを呼び寄せ、シセラの死体を見せることで、この戦いに終止符が打たれている(22節)。一連の描写の中で、「水」(mayim)と「ミルク」(halib)、「杭」(vated)は、「デボラの歌」と語彙が共通し、「槌」(maqabe)については、並行する五章の職人たちの「槌」(hamut)よりも一般的な語になっている。また、「こめかみ」(ragah)を杭で刺し貫かれたシセラが「倒れた」(ipil)とする表現にも並行が確認される。四章では、デボラの口を通して、

決定的な一打はある一人の女性の行動となることが予告されており（9節）、これによって、ヤエルの功績もまた神ヤハウェに帰されている。デボラが「女預言者」という称号を付されているのは、こうした事態とも関連している。また、四章の記述に見られる全体的な傾向として、一連の事の成り行きを、順を追って叙述することに主眼が置かれているのと共に、シセラがヤエルのいる場所に逃げて来たこと、シセラが水を所望したこと、ヤエルがシセラを殺害できたことなどに説得的な説明を施そうとする意図が伺える。

四章の記述と比較すると、五章24―27節で語られているヤエルによるシセラ殺害では、ヤエルへの祝福の言葉（24節）に続いて、唐突に「水を彼が求めた」(an'win sin)と言われ（25節）、動詞の主語である三人称単数男性の「彼」が、シセラであったことは、26節になつてはじめて明言されている。「デボラの歌」ではそもそも、ヤエルがシセラと接触した経緯は描かれていない。「デボラの歌」における記述は、ヤエルがシセラをどのように殺害したのかを説明するのではなく、殺害の瞬間に焦点が当てられて、その決定的な場面を切り取って、コマ送りのスローモーションのように描くことに集中している。また「デボラの歌」を締め括っているのは、シセラの母親と彼女の官吏たちとの場面である。戦争の終結そのものは描かれず、この場面があることで、シセラ軍の敗北が暗示され、両軍の間の戦いが終結したことを印象付ける。これに相当する記述は四章に一切なく、ここには、「デボラの歌」の詠い手の詩人としての秀逸性が見て取れる。

まとめ

『士師記』五章2―31節aの「デボラの歌」と、先行する『士師記』四章の散文による記述と比較すると、この歌の詠い手は明らかに、出来事の一連の経緯をすべて説明しようとはしていない。それらは専ら、読み手には既知の事

柄として前提とされている。この人物の関心はむしろ、重要な場面に焦点を当て、それらを印象的な形で描き出すことに置かれている。本稿では、『士師記』四章の記述との比較に終始したが、旧約聖書全体の文脈における「デボラの歌」の「間テクスト性」を問うのであれば、ヤハウェ顕現(士五4—5)の場面については、『詩編』六八編8—9節と個々の言葉遣いに至るまでの並行性が見出される。また15b—17節のルベン、ギレアド、ダン、アシエルという戦闘に参加しなかった部族についての段落は、『創世記』四九章13—14節のヤコブの祝福におけるゼブルン、イサカルへの言葉に語彙的な共通が見られる。これらの点について詳しく論じるには、しかし、稿を改めねばならない。

注

①「間テクスト性」については、H・フランケメレ「間テクスト性」、C・フレーフェル/A・ベルレユング編『旧約新約聖書神学事典』山智智久訳、教文館、二〇一六年、二二六—二二七頁など参照。

②主語が「デボラ」と「バラク」という男女二人であるにもかかわらず、動詞の語形が女性単数形になっている。この主語と動詞の性数の不一致から、デボラを主要人物、バラクを付随的な人物とする解釈もある(H. W. Hertzberg, *Die Bücher Josua, Richter, Ruth* (ATD 9), Göttingen 1965, 171, 旧約聖書翻訳委員会編『旧約聖書IV ヨシユア記・士師記』岩波書店一九九八年、一二五頁、注五「鈴木佳秀」など)。しかしながら、ヘブライ語の構文では、動詞の性数を直後に来る語のみ(本箇所の場合はデボラ)と一致させる場合がある。創三8、七7、民一二1、士一四5、サム下五21など。GK²⁸ §146f-g, Meyer, *Grammatik* §94b 参照。

③動詞 *pr'* の不定詞と、同語根から派生した名詞である *per'a* が組み合わされた句。語根 *pr'* の語義については P. C. Craigie, A Note on Judges V 2, *VT* 18 (1968), 397-399; T. Kronholm, *Art, pā'ā', in: ThWAT VI* (1989), 757-760 参照。七十人訳のアレク

サンドリア写本「指導者たちが指導する^αα」(ἐν τῷ ὑποστάθην ἰσχυροῦς)やテオドティオン訳を参考に、動詞^αに「指導する」という意味を想定する意見もあるが(Hertzberg, ATD 9, 171など参照)、旧約聖書中にそのような用例は見られない。旧約聖書中、動詞^αは、目的語^α「髪」を伴って、「ほどく」を意味する(レビ一〇6、一三45、二一10、民五18など)。また名詞^αは「伸ばした髪」を表すのに用いられ(民六5、申三三42、エゼ四四20。同語根のアッカド語 *pēru* 「頭髮」(AHw 86a)を参照)、その文脈は専ら祭司ないしはナジル人の規定である。するとこの句では、古代における戦争時の慣習、またはナジル人の誓願との類比で、戦争時の誓願が念頭に置かれているのかもしれない。この見解は、七十人訳のパチカン写本「覆いを取り払われた」(ἀπεκαλύφθη ἱσχύς^αα)ならびにシユンブロス訳によつて示唆されている。B. Lindars, *Judges 1-5, A New Translation and Commentary*, Edinburgh 1995, 225-227; H.-D. Neef, *Deboravertlung und Deboraled, Studien zu Jdc 4,1-5,31* (BThSt 49), Neukirchen-Vluyn 2002, 26-27; W. Groß, *Richer* (HTHK.AT), Freiburg u.a. 2009, 297-298など参照。

(4) 文法的には無くとも構わない一人称単数の人称代名詞である^ααが二度も繰り返されることで、詠い手としての「私」が強調されている。若干の写本は「私こそはヤハウエに」を、七十人訳のアレクサンドリア写本は二番目の「私こそは」を欠くが、同語の重複を避けるための削除であらう。

(5) 七十人訳のアレクサンドリア写本は「揺れた」(ἐκείνην)。これを参考に、BHS校訂者は^αα「波打った」、あるいは^αα^α「揺らいだ」と読み替えるよう提案するが、このような読み替えは不要である。

(6) 「流れ出る」を意味する動詞^αの旧約聖書中の用例は他に、民二四7、申三三2、イザ四五8、エレ九17、一八14、詩一四18、ヨブ三六28、雅四15に見られ、いずれも「水」や「露」という流動性のある物体を主語とする。それに対して本箇所的主語は「山々」であり、一見すると動詞の意味と合わないように思われる。七十人訳の^αα^αα^α「揺れ動いた」やイザ六三19、六四2を参考に、BHSやBHQ校訂者は^ααに「揺れ動く」と読み替えるよう提案するが、本文批評上、「より難しい読み」(*lectio difficilior*)であるマソラ本文が優先される。

(7) 本節には、交通の要としての道路を表すのに、二つの語彙が用いられている。一つ目の「途」(*orah*、旧約中に五七例)は、詩文に多く見られ、用例の約四分の一は、最も一般的な「道」(*dereḳ*、士五10参照)と並行する。二つ目の「徑」(*nēbāh*、旧約中に二一例)も、上記の二つの語彙いずれかとほぼ常に並んで出る。BHS校訂者は最初の *orāhōt* 「途」を、母音符号を打ち替えて *orhōt* 「隊商」と読むよう提案し、日本語訳の多くはこれに従っているが(口語訳、新共同訳、新改訳2017、フランシスコ会訳、岩波訳など)、これを支持する写本や古代語訳はない。BHQ55*参照。

(8) 名詞 *p'vāzōn* は、旧約聖書中、本箇所と後出の士五11にのみ見られる語で、その意味をめぐっては、「農民」(W. Richter, *Traditionsgeschichtliche Untersuchungen zum Richerbuch* (BBB 18), Bonn 1966, 72; Neef, *Deborazählung*, 31など参照)、「指導者」(A. Weiser, *Das Deborahlied*, ZAW 71 (1959), 76f; H. Pfeiffer, *Jahwes Kommen von Süden*, *Jdc 5*, *Hab 3*; *Dm 33 und Ps 68 in ihrem literatur- und theologiegeschichtlichen Umfeld* (FRLANT 211), Göttingen 2005, 35など参照)、「戦士」(P. C. Craigie, *Some Further Notes of the Song of Deborah*, VT 22 (1972), 350など参照)など意見が分かれる。「開けた地の住民たち」という試訳は、同語根に由来する *p'vāzōt* 「開けた(城壁のない)地」(エゼ三八11、ゼカ二8、エス九19)や *p'vāz* 「城壁のない村」(申三5、サム上六18)との類比に基づく。Groß, HThK.A.T., 298など参照。

(9) 動詞 *qm̄y* に付されているマソラの母音符号は、一人称単数形を主語とする。しかし、子音字のみの文字列は語形的に、古拙な二人称女性単数形「あなた」を主語と解することと *q̄m̄y* (エレ三一21など)。GK²⁸ § 44h; Neef, *Deborazählung*, 32; Lindars, *Judges*, 238など参照。

(10) あるいは、「彼(＝イスラエル)は新しい神々を選ぶ」(七十人訳など)。どちらの理解も文法的には可能である。「選ぶ」を基本的な意味とする動詞 *bḥr* は、『士師記』では本箇所以外、一〇14にのみ見られる。ここでは「イスラエルの子ら」を主語、「神々」を目的語とする。本節の *bḥr* の主語を「イスラエル」と見なす意見は、これとの類比による。Neef, *Deborazählung*, 33など参照。しかしながら、「デボラの歌」においては、イスラエルの民による異教崇拜は異質なモチー

のである。A. Scherer, *Überlieferungen von Religion und Krieg. Exegetische und religionsgeschichtliche Untersuchungen zu Richter 3-8 und verwandten Texten* (WMANT 105), Neukirchen-Vluyn 2005, 119など参照。

(11) 原文の *laiem* を、「戦う」を意味する語根 *lm* から派生した名詞と解する。シラ一二五のヘブライ語写本、七十人訳のバチカン写本 (ἐρωδείμῃον) 「(彼らは) 戦った」などを参照。七十人訳のアレクサンドリア写本では、「パン」 (ἄρτον)。さまざまなテクストの読み替えの提案については、Lindars, *Judges*, 239-241 参照。

(12) *šāhor* は、旧約聖書中、本箇所のにみに見られる語で、その正確な意味は不明である。「白い」という訳語は、中世ヘブライ語の *šāhor* 「明るい、白い」からの類推。

(13) 動詞 *šm* が表すのは、熱意的ないし感情的な語りであるとされ (H.-P. Müller, *Die hebräische Wurzel šm*, VT 19 (1969), 361-371 参照)、文脈に応じて、神称赞 (詩一〇五2、代下一六9など)、嘆き (詩五五18、ヨブ七11など)、嘲弄 (詩六九13など)、懲戒 (箴六22など) などを意味する。

(14) *mas'ab* の語の用例は、旧約聖書中、本箇所のみであるが、「水を汲む」を意味する動詞 *šab* (創二四11、サム上七6など) からの派生語と見なす。

(15) 歌を「語る」(*šbr p*) という表現は、一見すると奇異な印象を覚えるが、これはおそらく「デボラ」(*deborāh*) との語呂合わせを意図したものと思われる。Neef, *Deborazählung*, 36 参照。

(16) 名詞 *šarid* は、主に戦いにおいて、絶滅を免れた者を表す (民二四19、申二34、ヨシュ八22など)。本箇所ではおそらく、6-7 節に描かれている全住民を襲った危機的な状況から脱した者たちを指しているよう。Groß, *Richter*, HThKAT, 321 参照。BHS 校訂者などがこれを「イスラエル」と読み替えるよう提案している他、ヨシュ一九10、12 を参考に「サリド」という町の名で解するべきとする意見もあるが (N. Na'aman, *Literary and Topographical Notes on the Battle of Kishon* (Judges IV-V), VT 40 (1990), 423ff 参照)、それらの必要性はなさ。

(17) 本節に二度見られる *y'rad* という語について、どちらも母音符号を *yārad* と読み替え、「下る」を意味する動詞 *yad* のカル完了三人称男性単数形と解する。Lindars, *Judges*, 250f; Groß, HThKAT, 299 など参照。「支配する」を意味する動詞 *rad* のピエル未完了形とする解釈もあるが (Neef, *Deboraherzählung*, 21, 36f など参照)、『この動詞が前置詞 *le* をとることはなく、また動詞 *rad* のピエル形の用例は旧約中に見られない。

(18) マソラ本文では、節の前半と後半を区切るアクセント記号アトナハ (*Amach*) が「民」に付されているが、この語は直後の「ヤハウエ」と結び付いて連語を構成していることから、アトナハの位置を「民」の前にある「貴人たちのもとに」に移す。

(19) ここに出る「アマレク」を、イスラエルの宿敵で、ギデオン伝承においてもミディアン人と共にイスラエルを攻めた東方の諸民族の一つ (士六 3、七 12 など参照) と捉えると、エフライム族に属する者たちについて語る本箇所では意味をなさないことから、『さまじく』の読み替えが提案されてきた。読み替えの提案の一覧は、H.-D. Neef, *Ephraim. Studien zur Geschichte des Stammes Ephraim von der Landnahme bis zur frühen Königszeit* (BZAW 238), Berlin/New York 1995, 162ff; Lindars, *Judges*, 252f など参照。しかしながら、士二 15 には小士師の一人であるアブドンの埋葬場所として、「アマレク人の山にあるエフライムの地のビルアトン」という表現があり、これとの関連で「アマレク」を捉えると、テキストの読み替えを行う必要はなさず。J. A. Soggin, *Amalek und Ephraim*, Richter 5,14, ZDPV 98 (1982), 58-62 など参照。

(20) 原語の *soper* について、アッカド語の *šapāru* との類比から、「支配者」の意味が想定されることもあるが (新共同訳、岩波訳など参照)、『書記』を、王下二五 19 にあるような徴兵を担当する高官と見ることと十分に意味をなす。Lindars, *Judges*, 255; BHQ 60* など参照。

(21) 七十人訳、ヘシッタ、ウルガタなどは、マソラ本文の *šāray* 「わが官吏たち」を複数連語形の *šāre* に読み替えている。Lindars, *Judges*, 255-256; Neef, *Deboraherzählung*, 39, Anm. 56; Groß, HThKAT, 300 など参照。

(22) 原語の *b'raglaw* はしばしば、「彼の後に従って」(士四 10、八 5 など参照) と訳されるが、その場合には「彼」が誰を指すか

が定かではない。試訳は、W. Grob, HTHKAT, 300に従って、これを文字通りに「彼の足で」＝「徒歩で」と解する。これにより、戦車を持っていたものの、戦いに敗れて「徒歩で」敗走することになるシセラ（士四15、17参照）との対比が際立つ。
(26) 16節bとの並行を踏まえて、若干の写本やペシッタと共に、*hag*「定め」を16節bと同じ *heqer*「探り」へと読み替えるべきとする意見もあるが（Lindars, *Judges*, 259など参照）、七十人訳でも両箇所には別語が充てられており、マソラ本文を読み替える必要はない。BHQ 61*など参照。

(24) 原語の *nuṣṣā'im* は、旧約聖書中、本箇所と創四九14にのみに見られる語で、その詳細な意味は不明である（なお、エゼ四〇43、詩六八14の **pariayim* も参照）。七十人訳のアレクサンドリア写本では *moqdehu* と音写され、パチカン写本では *dyoyia* 「二つの荷」と訳されている。そこから、動物の背の左右にかける「二つの荷袋」とする意見もある。試訳は、強盗や略奪者などの危険が生じた場合に口笛や叫び声で群れを素早く駆り立てて保護するための「二重の囲い、柵」と見る立場を採る。この語をめぐるさまざまな見解について、Lindars, *Judges*, 260-261 など参照。

(25) 語根 *dh* に由来する名詞 **daharāh* が二度繰り返されている（旧約聖書中の用例は本箇所のみ）。同語根の動詞としての用例は、旧約聖書中、ナホ三2のみであるが、そこでも戦いにおける馬の疾走について述べられる。

(26) 原語 **abb* の基本的な意味は「強い」。本箇所と同じように、馬の形容として用いられているのは、エレ八16、四七3、五〇11。
(27) 語根 *hm* 「打つ」（士五22、26参照）に由来する *halmā* は、旧約聖書中、本箇所のみに見られる語。並行する士四21では、作業用の槌を表す *muqzebet*（用例は他に、王上六7、イザ四四12、エレ一〇4）が用いられている。

(28) 原文は語根 **sāḥ* のカル受動分詞で、しばしば「息絶えた」（新共同訳、聖書協会共同訳）、「打ち殺された」（岩波訳）などと訳されるが、この動詞は一般的に、戦争における略奪ないし破壊を表す（イザ三三1、詩一三七8など参照）

(29) 本節では、「窓」を表すのに、語根 *hl* 「穿つ」、「貫く」に由来する *hallin* と、語根 *nzb* 「（風が）吹く」に由来する **asāḥ* という語が用いられている。これら二語の並行は、箴七6にも見られる。「窓」について言及されるのは、神殿や宮殿などの

比較的大きな建造物の場合である。窓から「眺め下ろす」(*šqr nif*)という表現は、創二六八、サム下六16＝代上一29、王下九30、箴七6にも見られる。これは、窓が専ら上階に設けられていたことを示唆している。

- (30) 語根 *ybb p.* は、旧約聖書中、本箇所に見られる語彙である。同語根のアラビア語 *abbaba* 「大声で叫ぶ」、エチオピア語 *yab(b)aba* 「歓声を上げる」などとの類比から、「嘆く」「大声で叫ぶ」などの意味が推測される。これを語根 *nbf hif* 「眺める」と読むよう提案する者もいる。

- (31) 形容詞 *hakam* 「賢い」の女性複数形が、「彼女の女官吏の」(*šārāḫā*) という人称接尾辞を伴った部分を示す属格によって、最上級が表現されている。GK[※] §133h を参照。

- (32) 山吉智久「彼らはヤハウェの目に悪を行った——士師記の『循環的』定式——」、『北星論集』五八(二〇一八年)「三〇頁など参照。

- (33) 「デボラの歌」の文学的な構成については、注解書以外に、P. R. Ackroyd, The Composition of the Song of Deborah, VT 2 (1952), 160-162; A. Globe, The Literary Structure and Unity of the Song of Deborah, JBL 93 (1974), 495-496; U. Bechmann, *Das Deborahlied zwischen Geschichte und Fiktion. Eine exegetische Untersuchung zu Richter 5*, St. Ottilien 1989, 80-103; S. Becker-Spörl, „Und Debora sang an jenem Tag.“ *Untersuchungen zu Sprache und Intention des Deborahliedes (Ri 5)* (Europäische Hochschulschriften XXXIII/620), Frankfurt 1998, 107-162; M. A. Vincent, The Song of Deborah. A Structural and Literary Consideration, JSOT 91 (2000), 61-82; Neef, *Deborahszählung*, 23-25; S. Frolov, *Judges* (FOTL 6B), Grand Rapids 2013, 126-130; I. Knohl, The Original Version of Deborah's Song, and its Numerical Structure, VT 66 (2016), 51-55 など参照。

- (34) P. Guillaume, *Waiting for Josiah. The Judges* (The Library of Hebrew Bible/Old Testament Studies 385), London/New York 2004, 31 参照。

- (35) サム下二〇章では、ダビデに反旗を翻したシエバがいる町を包囲したヨアブに対して、ある一人の「賢い女」が叫び声を上げて、「町とイスラエルの母」のために交渉を行い、反逆したシエバの首をはねて、城壁の上からヨアブのもとに投げ落とす。

(36) 十二、16、三10、一二7、一五20、一六31参照。山吉「循環的定式」三〇頁参照。

(37) 他には、詩八三10において、この時の出来事を回顧して、「キシヨン川でのシセラとヤビンのように」と言われる。

(38) この「ハロシエト・ハゴイム」は、旧約聖書中、『士師記』四章の文脈上でのみ言及される地名であり(13、16節)、さまざまな同定が試みられているものの、正確な場所是不明である。さまざまな提案については、E. Gaß, *Die Ortsnamen des Richterbachs in historischer und redaktioneller Perspektive* (ADPV 35), Wiesbaden 2005, 236-240参照。

(39) 山吉「循環的定式」三二頁など参照。

(40) M. Noth, *Das System der zwölf Stämme Israels* (BWANT 52), Stuttgart 1930, 36; S. Beyerle, Art., *Machir*, NBL II, 681-682; 参照。

(41) M. Görg, Art., *Gilead*, NBL I, 844; 参照。

(42) Neef, *Deboraezählung*, 170; Gaß, *Ortsnamen*, 93-100 参照。

(43) Neef, *Deboraezählung*, 170; Gaß, *Ortsnamen*, 90-93 参照。

(44) Neef, *Deboraezählung*, 168f; Gaß, *Ortsnamen*, 254f; ders., *The Deborah-Barak Composition* (Jud 4-5), *Some Topographical Reflections*, *PEQ* 149 (2017), 328f 参照。

(45) Neef, *Deboraezählung*, 167; Gaß, *Ortsnamen*, 251-254 参照。

(46) 原語の *šmīkāk* は、旧約聖書中、本箇所のみに用いられる語。二つの写本では、最初の子音がスインではなくサメクで書かれている。語根 *smk* と同語根のアカド語は、*šamaku (m)* 「上覆う」(AHw 1017a 参照)。七十人訳のアレクサンドリア写本では、*šēpīq* 「(天幕の)皮」、七十人訳のバチカン写本では、*ēpōlaxov* 「覆う」。

(47) 動詞 *ʾnd* の命令形だが、男性形になっている。女性であるヤエルへの言葉であるため、BHS 校訂者は、ペシッタ、タルグムを参考に、女性形に読み替えるよう提案している。独立不定詞に読み替える解決案もある (GK³⁸ § 113bb 参照)。